様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月　 １ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ００９４８

研究課題名（和文）人類学的フィールドワークを通じた情動研究の新展開：危機を中心に

研究課題名（英文）New Anthropological Approach to Affecive Studies through Fieldwork of Critical Situations

研究代表者
西井　凉子（NISHII, RYOKO）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：２０２６２２１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　32,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、理性に対置されてきた「情動」こそが人と人を結びつける社会性の根幹にあるという理論的な展望と、身体と感性を基盤として現場から問題をたちあげてきた人類学的な臨地調査の方法論とを接続することにより、情動生成のプロセスを実証的に解明することを目的とした。近年多発する災害・紛争・テロリズムといった危機的状況の只中でも人々は日常性を維持すべく共同的な生を営んでいる。本研究では、日常的な生活の局面を基盤とし、偶発的・受動的に巻き込まれたり、逆に能動的に統制される局面を多角的に考察することで、情動研究に新たな展開をもたらし、世界の見方を根源的なところから問い直し、生の現実の新たな側面を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
情動（affect）は、存在と関係を同時に捉えることを可能にする概念であり、本研究はそうした視点からどのような世界の新しい捉え方が浮上してくるのかを、様々な分野・テーマの検討を通して具体的に示したものであり、人文学・社会科学にとって大きな学術的意義を有する。また、新型コロナウイルス感染症の蔓延が我々の生活のあり方を瞬く間に一変させた状況からも、人間とそれをとりまく諸存在のあり方、つまり生きる世界のあり方の転換が必要とされており、本研究が提案しているラディカルな視点移動はこうした今日の社会的要請と深く響き合うものであるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to empirically elucidate the process of affective generation by connecting the theoretical view that "affect", which has been opposed to reason, is the basis of sociality that unites people, and the methodology of anthropological field research, which has raised issues from the field based on the body and sensibility. Even in the midst of crisis situations such as disasters, conflicts, and terrorism that have occurred frequently in recent years, people are living communally in order to maintain their daily lives. By examining from multiple perspectives the aspects of daily life in which people are involved incidentally and passively or, conversely, are actively controlled, this research has brought about a new development in the study of affect, questioned the way we look at the world from a fundamental point, and presented a new aspect of the reality of life.

研究分野：文化人類学

キーワード：情動　アフェクト　能動的受動性　日常　危機

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

冷戦終結後のアジア・アフリカ諸国では、未曾有の経済発展を遂げる地域が出現する一方、地震や津波といった自然災害、内戦や暴動といった事件が各地で頻発した。また、近年の欧米諸国における、いわゆるテロリズムの激化や排外主義の高まりは、生命や財産あるいは予測された日常が不合理に奪われることへの不安や恐れを世界規模で増大させている。理性によって制御されてしかるべきはずのこうした危機の蔓延は、合理的理性を前提に構築されてきた人文社会諸科学に、抜本的な視座の転換を要請しはじめている。かかる情況において注目されるのが「情動」にほかならない。

情動は、これまで感情や情緒といった人間の主観的な現象として議論されており、英語では passion、emotion、feeling、affect、sense などの用語で表される。近代西欧思想においては、理性と対立するもの、統御されるべき passion 等として考察され、「受動性 *passio*」に本質があると捉えられてきた。このため、近代以降学問全体が自由意思や能動性を特徴とする主体的な人間のあり方を追求するなかで、情動は問題解決をもたらすべき研究対象から外される傾向にあった。

しかしながら、国際的に見た場合、とりわけ 1990 年代から、affect という用語により、情動から人間を捉え返すことで新たな視野を拓こうとする動向がさまざまな学問分野において胚胎するようになった。いわゆる「情動論的転回」である（Clough, T. & J. Halley eds., *The Affective Turn: Theorizing the Social* , Duke University Press, 2007）。とりわけ顕著な成果が示されたのは、神経科学や認知心理学といった自然科学系の研究であり、たとえば A.R.ダマシオ（『デカルトの誤り：情動、理性、人間の脳』筑摩書房、2010 年）は、脳科学に「身体」の視点を導入することで、情動が脳内の生理・心理現象ではなく、身体と脳との相互作用から生じる動態的現象であることを明らかにした。またミラーニューロンの発見により、霊長類がもつ他者への共感能力の基底性が神経細胞レベルにおいても解明されたことで、人類が理性に基づく社会契約に先立ち、情動に基づく共感作用を通じて社会性を獲得してきた可能性が実証されつつある。

これに対し人文社会科学の分野では、情動が人間の生理反応や心理には還元できない社会的な現象であることに着目した研究が登場している。すなわち個体内部で完結することなく、他なる者に影響を与え／与えられる＜もの＞としての情動、スピノザのいう「動揺させるもの *affectus*」としての情動を捉える試みである。そこでは、個人の感じる喜怒哀楽や快・不快といった感情や感覚も、主観的ではなく、間主観的出来事として捉えられ、個の身体を越えて拡張していく情動の共同性が焦点化されてきた。政治学や社会学では、こうした視角が排外主義・ナショナリズムの研究やマスメディア・ソーシャルメディア研究に応用され、優れた成果が生み出されている。

とはいえ、これらの人文社会学的研究が論じる間主観性とは、そのほとんどが研究対象相互の主観性を問題化しており、「研究対象の情動を分析する研究主体」は間主観性の圏外におかれがちであった。この点に人類学が情動研究において独自の貢献をなしうるポイントがある。人類学は、実験や文献ではなくフィールドワークを方法論の柱とする。それは「今・ここ」における研究者の身体・感性の総体からフィールドの実態を解明する技法である。なぜ、身体として共在することが重要なのか。自然科学が明らかにしたように、情動は身体を介した感応する能力に基礎をおく。だが情動は、自然科学が志向する客観的性質ばかりでなく、視点に応じて異なった様相を示すような、いわば内部観測的視点をとることで生成される性質をもつ。ゆえに出来事を外部から観測するだけでなく、観察者自身が出来事へ参与することにより内部から観測することが重要となる。ただし身体が異なれば視点も異なり、出来事が視点ごとに無数に存在すると主張するわけではない。ある場において共に関与する出来事に焦点化すれば、そこに研究者が身体として存在することによって経験にはなんらかの

共通する情動生成のプロセスが見いだせると考える。本研究の目的は、そのプロセスを具体の場から実証的に解明することである。

研究代表者の西井は、こうした展望の下、内在的視点から情動生成の民族誌を記述する方法を独自に追及し、その成果を、2011 年には論集『時間の人類学：情動・自然・社会空間』として、2013 年には単著『情動のエスノグラフィ』として公刊した。本研究では、これらの成果をより理論的に展開し、情動研究を学際的かつ国際的に牽引することを試みるものであった。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、理性に対置されてきた「情動」こそが人と人を結びつける社会性の根幹にあるという理論的な展望と、身体と感性を基盤として現場から問題をたちあげてきた人類学的な臨地調査の方法論とを接続することにより、情動生成のプロセスを実証的に解明することである。近年多発する災害・紛争・テロリズムといった危機的状況の只中でも人々は日常性を維持すべく共同的な生を営んでいる。本研究では、アジア･アフリカにおける多様な現場から、日常的な生活の局面を基盤とし、偶発的・受動的に巻き込まれる危機の局面、逆に能動的に統制された祝祭の局面の３つを多角的に考察することで、情動研究に新たな展開をもたらすことを目指した。本研究の特色は、情動の社会性に着目する人文社会系の知見と、その社会性が人間の生物学的身体と共感能力に発するという自然科学系の知見をふまえ、研究者自身の身体と感性を基盤とした人類学的な臨地的方法論を柱とする新たな情動研究の可能性を切り拓こうとする点にある。

こうした研究には、自然災害や暴力的事件が多発する近年の世界情勢にてらして少なからぬ意義がある。発展を夢見る人々の期待や喜びであれ、危機を生きる人々の不安や恐怖であれ、当事者ならぬ研究者はその場において身体を拓いて情動を感受し、かつ、それと同時に情動に包含されることなく理論や民族誌などのテキストを生成させる。それらは当事者の情動を他者へと媒介する回路となるだろう。他者との相互理解には「対話」が必要だと言われる。紛争、テロリズム、排外主義といった「対話」なき暴力の世界的な蔓延は、理性に基づく「対話」型の他者理解のモデルに根本的な疑問を投げかけている。情動を介した他者理解の可能性を追求する本研究は、言語的理性を素朴に信頼する近代的思考様式の乗り越えの可能性を切り拓くことが期待された。

## ３．研究の方法

本研究の方法論の柱となるのは人類学的なフィールドワークである。より具体的には、参与観察とインタビュー／ヒアリング、録画や録音といった人類学的フィールドワークの一般的手法に加えて、出来事＝エピソードの被調査者との共同分析、さらには供述信用性評価といった供述心理学の技法を用いる。これらの方法により、かならずしも言語化されない行為や、一回性の偶発事にあらわれる情動を対象化する。各班のメンバーは共通の主題のもとで密に情報交換と議論を行うこととした。

研究構成としては、それぞれの調査地において長期のフィールドワークを実施してきた研究者を結集することで、情動が個を越えたレベルで発現するプロセスを以下 3 つの局面から解明する方法をとった。

（1）生活における情動：生業活動や日々の人間関係をはじめとした、社会的な相互行為に生成する情動の流れや働きに着目し、一見理性的な判断や行為も情動を媒介することではじめて現実化していることを明らかにする。

（2）危機における情動：（1）とは対称的に、自然災害や紛争といった予期せぬ出来事をめぐって現われる情動の様態を明らかにする。現実の危機に際して経験する情動ばかりでなく、危機を生み出す情動や、危機を乗り越える情動といった多様な局面に着目する。

（3）祝祭における情動：儀礼や芸術、スポーツやゲームといった祝祭的な場を構成する情動は、日常的ではない点では（2）と同様である一方、あらかじめ定められた条件や規則の下で情動が表現／表出されるという点においては(2)と異なった位相で理解される必要がある。

本研究では、日常生活における情動の働きが災害や紛争といった危機において一層の深度をもって立ち現れる点と、祝祭という非日常の場では情動を介して共同性が構築される点に着目し、偶発的に情動が喚起される危機の局面(2)と逆に能動的に情動を作り出す局面(3)の双方から日常的な情動(1)を照射する。この多角的な考察により、危機から生まれた情動が、さらなる危機を生み出すメカニズムや、逆に危機の乗り越えと日常性の回復に寄与するプロセスの解明をめざした。

## ４．研究成果

本研究は、研究を進める過程で、様々な分野の研究者の関わりを要請することになった。研究成果は成果論集、2020 年 12 月刊行の『アフェクトゥス(情動)：生の外側に触れる』（西井涼子・箭内匡編、京都大学学術出版会）として結実した。本書の内容を説明することで、成果報告としたい。

本書は、人類学を中心に生命科学、認知心理学、哲学、芸術といった多様な分野の研究者が先端的な考察や実践を持ち寄って、「情動（アフェクト/アフェクトゥス）」の概念を焦点としつつ、密度の濃い議論を重ねた共同研究の成果であり、人文学・社会科学（さらには自然科学）に向けて、我々が生きる世界を把握する仕方を根底的に変えていくことを提案する挑戦的な学問的企てである。人間はこの世に誕生した瞬間から、身体として周囲の諸存在と相互に影響（affect）し合う中で生きていく。この諸存在の相互影響を指す言葉がスピノザの「affectus」であり、また本書でいう「情動（アフェクト/アフェクトゥス）」である。西欧近代的な人間観・自然観のもとでは、まず個々の人間や事物の存在が前提とされ、次にそれらの間の相互関係が二次的に検討されていく論理的順序が踏まれるが、我々の世界における根本的な存在様態においては、そのような論理的順序は存在しない。「affectus」は存在と関係を同時に捉えることを可能にする概念であり、本書はそうした視点からどのような世界の新しい捉え方が浮上してくるのかを、様々な分野・テーマの検討を通して具体的に示したものである。

人文学・社会科学はいま大きな転換を迫られている。地球温暖化の進行による緊迫した状況のもとで「人新世」という概念が一気に広まったように、人類は今日、我々を取り巻く世界との関係を根本的に捉え直さなければならないという感覚を共有するようになった。また、新型コロナウイルス感染症の蔓延が我々の生活のあり方を瞬く間に一変させたことは、人間が確固たる主体ではなく、人間社会が周囲の事物との見えない形での交渉を前提にして動いている状況を白日のもとに晒すものでもあった。人文学・社会科学が、人間とそれをとりまく諸存在のあり方、つまり生きる世界のあり方の転換について、明確なメッセージを出していくことが強く求められており、本書が提案しているラディカルな視点移動はこうした今日の社会的要請と深く響き合うものであるといえる。

本書の執筆者の半数あまりが人類学を専門としているが、近年、世界及び日本で、人類学の「存在論的転回」と称せられる動向が、人類学を超えて広く注目を集めてきたのも（例えば『現代思想』vol.44-5、45-4 を参照）、上記の問題意識の反映にほかならない。また欧米　諸国においては、2000 年代以降、「アフェクト論的転回 the affective turn」と称せられる学問的潮流（P. T. Clough and J. Halley、 The Affective Turn: Theorizing the Social (2007) や M. Gregg and G. Seigworth. The Affect Theory Reader (2010）など）が、社会的生の潜在的次元に着目し、西欧近代的な個人概念を相対化する企てを行い、広く知られるようになった。人類学を中軸としつつも多様な分野に向けて展開される本書の議論は、この両方の動きと関わり、この両方をさらに一歩先に進めるものである。もっとも、英米圏でのアフェクト論については、中核的存在であるブライアン・マッスミ(Parables for the Virtual: Movement、 Affect、 Sensation 2002 など）の議論自体、哲学者ジル・ドゥルーズによる　スピノザの affectus 概念の現代的蘇生を土台としているので、本書と類似した方向に向かったものであるといえる。しかしマッスミを含め、アフェクト論は無意識的なものや潜在的なものを強調するものの、基本的には西欧近代的な社会理論の相対化ないし裏返しに留まっている。つまり、先述した、個々の人間や事物の存在をまず前提とする議論の形式から本質的には抜け出ておらず、これが本書の立場と大きく異なる点である。

本書は、人間の行為が、西欧近代的な人間の特徴とされてきた主体性や合理性から発するもの

であるという見方とは逆に、その多くが非意図的な、本人が認知しないところでおこっていることをふまえ、個を超えた集合性の次元に着目することで、世界の見方の根本的な変革を行う企てである。

根本的な変革を具体的に述べると、まず第一に存在そのものをアフェクトゥスの相のもとで捉えることにある。それは、存在とは（人間も動物も植物も…）、互いにアフェクト（影響・作用）しあう中でも生まれそして崩壊し消えていくことそれ自体である、という方向から物事を眺めるということである。つまり、生の把握における重心を「存在」よりも「アフェクト」に向けて移動させることになる。第二には、目に見え体験されるものの水面下での異質で複雑な内在的な力の絡まり合いを生の潜在性として捉えなおし、現実を思考するようになることである。つまり、現実とは、視覚という目に見えるものだけからなるのではなく、夢や死者といった我々の生に影響するさまざまな目にみえないものからもなる。現実と仮想という区分は自明なものではなく、複雑に絡まりあいながら生をなりたたせているとみる。

このように、本成果論集を通じて、世界の見方を根源的なところから問い直し、生の現実の新たな側面を提示したことが、本研究の成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　6件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Gunji YP, Tani I & Shirakawa T | ４．巻<br>29 |
| ２．論文標題<br>Broken paradox of the heap: Comment on "Does being multi-headed make you better at solving problems? A survey of Physarum-based models and computations" | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>Physics of Life Review | ６．最初と最後の頁<br>44,47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Kyoko Nakamura & Yukio Pegio Gunji | ４．巻<br>25 |
| ２．論文標題<br>Entanglement of Art Coefficient, or Creativity | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>Foundations of Science | ６．最初と最後の頁<br>247,257 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Yukio-Pegio Gunji & Kyoko Nakamura | ４．巻<br>25 |
| ２．論文標題<br>Dancing Chief in the Brain or Consciousness as an Entanglement | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>Foundations of Science | ６．最初と最後の頁<br>151,184 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>浦上大輔・郡司ペギオ幸夫 | ４．巻<br>56(1) |
| ２．論文標題<br>非同期セルオートマトンによるリザバーコンピューティング | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>計測自動制御学会論文集 | ６．最初と最後の頁<br>8-15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>近藤和敬 | 4．巻<br>47(10) |
| 2．論文標題<br>ジルベール・シモンドンの個体化の哲学にみるアインシュタインの影響 ： 特異性-場の二重分節としての個体化とアラグマティックな関係 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>現代思想 | 6．最初と最後の頁<br>207,221 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>高木光太郎 | 4．巻<br>11 |
| 2．論文標題<br>説明の部品化と証拠のネットワーク：「ナラティヴ工場」としての法廷 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>N: ナラティヴとケア | 6．最初と最後の頁<br>18.54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>箭内匡 | 4．巻<br>1 |
| 2．論文標題<br>自然と身体の人類学 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>「人新世」時代の文化人類学 | 6．最初と最後の頁<br>194,209 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>箭内匡 | 4．巻<br>1 |
| 2．論文標題<br>イメージと創造性の民族誌 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>「人新世」時代の文化人類学 | 6．最初と最後の頁<br>210,224 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐久間寛 | 4．巻<br>94 |
| 2．論文標題<br>黒いソクラテスは語る：創始者アリウン・ジョップと学生組織 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>アフリカ研究 | 6．最初と最後の頁<br>49,59 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐久間寛 | 4．巻<br>94 |
| 2．論文標題<br>序論：プレザンス・アフリケーヌとは何か | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>アフリカ研究 | 6．最初と最後の頁<br>21,33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐久間寛 | 4．巻<br>22 |
| 2．論文標題<br>祓えぬ負債に憑かれること：ニジェール西部における調査経験から | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>白山人類学 | 6．最初と最後の頁<br>59,77 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>池田昭光 | 4．巻<br>20 |
| 2．論文標題<br>レバノンにおける高齢社会のフィールドワークから見えてきたこと | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>FIELDPLUS | 6．最初と最後の頁<br>20,21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>高島淳 | 4．巻<br>91 |
| 2．論文標題<br>インドにおける終焉期の仏教―南インドを中心に | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>宗教研究 | 6．最初と最後の頁<br>307,308 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>佐久間寛 | 4．巻<br>140 |
| 2．論文標題<br>自由と負債：カール・ポランニー2.0の経済人類学 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>哲学 | 6．最初と最後の頁<br>1,33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Sakuma, Yutaka | 4．巻<br>91 |
| 2．論文標題<br>Surrogate of Fear: An Ethnographic Study of Hippopotamus Hunting in the River Niger | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>Journal of African Studies | 6．最初と最後の頁<br>17,28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>久保明教 | 4．巻<br>49(11) |
| 2．論文標題<br>強い(かわいい)とは何か――将棋ソフトからみる加藤一二三と「ひふみん」の狭 間 | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>ユリイカ | 6．最初と最後の頁<br>182,190 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>SHIMIZU Hiromu | ４．巻<br>18(1) |
| ２．論文標題<br>Reflection on the “Anthropology of Response-ability through Engagement: A Long and Winding Road from Fieldwork to Ethnography, Commitment and Further Beyond | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>Japanese Review of Cultural Anthropology | ６．最初と最後の頁<br>5,36 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

〔学会発表〕　計22件（うち招待講演　3件／うち国際学会　13件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>岡崎彰 |
| ２．発表標題<br>夢と情動――スーダン東南部における影の共同体 |
| ３．学会等名<br>「ダイナミズムとしての生―情動・思考・アートの方法論的接合」AA研課題研究会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>SAKUMA, Yutaka |
| ２．発表標題<br>Le Socrates noir parle ...: Alioune Diop et l'organisation des etudiants noirs |
| ３．学会等名<br>Presence Africaine : Espaces, langues, cultures, politiques et societes dans l ’ espace francophone (Afrique, Amriques, Asie, Europe) du colonial au post-colonial（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>SAKUMA, Yutaka |
| ２．発表標題<br>Dette et societe au Niger |
| ３．学会等名<br>Seminaire de UMR (7367) , Dynamiques Europeennes "Mondialisation et mutations sociales en Afrique"（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nawa, Katsuo |
| ２．発表標題<br>Undertaking Research on Transnational, Interdisciplinary and Multicultural Issues |
| ３．学会等名<br>ribhuvan University International Conference "Internationalization of University Education"（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nishii, Ryoko |
| ２．発表標題<br>Convert’s body as an arena of entangled Muslim-Buddhist relationships in a Southern Thai village |
| ３．学会等名<br>International Conference on Resources and Human Mobility (Jointly organized by Mahidol University International College（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>久保明教 |
| ２．発表標題<br>「手作り」という幻想： 家庭料理のネットワーク論 |
| ３．学会等名<br>日本記号学会第38回研究大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yutaka Sakuma |
| ２．発表標題<br>The Potential of Debts that Cannot Be Paid |
| ３．学会等名<br>8th African Forum in Accra: Futurity in African Realities（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Ikuya Tokoro |
| ２．発表標題<br>Preliminary Study on Role of Civil Society in the Mindanao Peace Process |
| ３．学会等名<br>International Conference on Progressive Civil Society（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nishii, Ryoko |
| ２．発表標題<br>Life as a house- the case of Na Chua:An Assemblage of phi norng (Relatives) in Southern Thailand |
| ３．学会等名<br>International workshop: Encounters in Fieldwork : the Influence of Vincent Crapanzano（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>IKEDA, Akimitsu |
| ２．発表標題<br>Sectarian Tension and Everyday Life: Case of Lebanon |
| ３．学会等名<br>ILCAA International Symposium “Coping with Vertiginous Realities”（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>IKEDA, Akimitsu |
| ２．発表標題<br>Sectarianism Within and Without: Everyday Interaction in a Lebanese Town |
| ３．学会等名<br>World Congress for Middle Eastern Studies（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>池田昭光 |
| ２．発表標題<br>自著紹介――書かれなかった後書き |
| ３．学会等名<br>アジア・アフリカ言語文化研究所ワークショップ「『危機』にふれる――レバノンとケニアのフィールドをめぐるふたつの著作から |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Ryoko, Nishii |
| ２．発表標題<br>The Da'wa movement in Pai town-how to continue its passion |
| ３．学会等名<br>13th International conference on Thai, Studies（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Ryoko, Nishii |
| ２．発表標題<br>Converts and death：Muslim-Buddhist relationships in a Southern Thai village |
| ３．学会等名<br>東南アジアのイスラムと文化多様性に関する学際的研究（第三期）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐久間寛 |
| ２．発表標題<br>戦場としての大河、劇場としての大河：J.ルーシュ「大河での戦い」をめぐる一注釈 |
| ３．学会等名<br>日本文化人類学会関東地区研究懇談会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐久間寛 |
| ２．発表標題<br>オーラルからモーラルへ：ニジェール西部の人と土地をめぐる社会関係 |
| ３．学会等名<br>白山人類学研究会2017年度第1回定例研究会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>高島淳 |
| ２．発表標題<br>インドにおける終焉期の仏教―南インドを中心に |
| ３．学会等名<br>日本宗教学会第76回学術大会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>深澤秀夫 |
| ２．発表標題<br>北西部地方における2017年旱魃 |
| ３．学会等名<br>在マダガスカル・邦人会文化講演会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yohei, Fujino |
| ２．発表標題<br>Recent Tendency of the Taiwanese Church in the Taiwan Independence Movement |
| ３．学会等名<br>34th Conference 2017 (International Society for the Sociology of Religion)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤野陽平 |
| ２．発表標題<br>台湾のキリスト教徒による靖国参拝と独立運動 |
| ３．学会等名<br>日本宗教学会第76回学術大会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yoshida, Yukako |
| ２．発表標題<br>Imperfect Bodies and Comedy in Balinese Theater |
| ３．学会等名<br>Art and Disability: The cases from Africa and Asia", Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>久保明教 |
| ２．発表標題<br>パケットの中の他性――『ポケモン』と外部なき世界の人類学 |
| ３．学会等名<br>早稲田文化人類学会公開シンポジウム『超―人類学　この時代を生きるために』 |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計11件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>久保明教 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>コトニ社 | ５．総ページ数<br>213 |
| ３．書名<br>家庭料理という戦場―暮らしはデザインできるか？ | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>近藤和敬 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>青土社 | ５．総ページ数<br>494 |
| ３．書名<br>内在の哲学へ――ドゥルーズ、カヴァイエス、スピノザ | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>KAWAI, Kaori | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>Kyoto University Press and Trans Pacific Press | ５．総ページ数<br>506 |
| ３．書名<br>”Others: The Evolution of Human Sociality ” | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>久保明教 | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>講談社 | ５．総ページ数<br>224 |
| ３．書名<br>機械カニバリズム　人間なきあとの人類学へ | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中村恭子、郡司ペギオ幸夫 | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>水声社 | ５．総ページ数<br>198 |
| ３．書名<br>TANKURI 創造性を撃つ | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>郡司ペギオ幸夫 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>講談社メチエ | ５．総ページ数<br>256 |
| ３．書名<br>天然知能：意識の向こう側 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>箭内匡 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>せりか書房 | ５．総ページ数<br>306 |
| ３．書名<br>イメージの人類学 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤野陽平、他 | ４．発行年<br>2017年 |
| ２．出版社<br>ミネルヴァ書房 | ５．総ページ数<br>252 |
| ３．書名<br>多文化時代の観光学 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Kawai, Kaori, Yokoro, Ikuya 他 | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>京都大学学術出版会 | ５．総ページ数<br>420 |
| ３．書名<br>An Anthropology of Things | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>岡崎彰、他 | ４．発行年<br>2017年 |
| ２．出版社<br>明石書店 | ５．総ページ数<br>312 |
| ３．書名<br>難民問題と人権理念の危機 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>西井 涼子、箭内 匡 他 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>京都大学学術出版会 | ５．総ページ数<br>460 |
| ３．書名<br>アフェクトゥス（情動） | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 吉田　ゆか子<br>(Yoshida Yukako)<br>(00700931) | 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授<br>(12603) | |
| 研究分担者 | 深澤　秀夫<br>(Fukazawa Hideo)<br>(10183922) | 東京外国語大学・その他部局等・名誉教授<br>(12603) | |
| 研究分担者 | 箭内　匡<br>(Yanai Tadashi)<br>(20319924) | 東京大学・大学院総合文化研究科・教授<br>(12601) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 高木　光太郎<br>(Takagi Kotaro)<br>(30272488) | 青山学院大学・社会情報学部・教授<br>(32601) | |
| 研究分担者 | 河合　香吏<br>(Kawai Kaori)<br>(50293585) | 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授<br>(12603) | |
| 研究分担者 | 佐久間　寛<br>(Sakuma Yutaka)<br>(80726901) | 明治大学・政治経済学部・専任講師<br>(32682) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

| | |
|---|---|
| 国際研究集会<br>Coping with vertiginous realities | 開催年<br>2018年～2018年 |
| 国際研究集会<br>Encounters in Fieldwork : Under the Influence of Vincent Crapanzano | 開催年<br>2018年～2018年 |

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|